

平成19年度 学校評価に対する最終評価報告書

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1 授業改善に努め、「わかる授業」、「達成感を味わえる授業」を実践し、学力の向上を図る。	① 研究授業を制度化する。	研究授業の年間実施回数が A 30回以上 B 20回以上 C 10回以上 D 10回未満	B	研究授業制度化の程度や各教科の取組状況は概ね良好と思われる。 マンネリ化が懸念されるので、次年度も同様な達成度判断基準で実施したい。
	② 生徒による授業評価を活用し、授業改善に役立てる。	授業評価の基準で総合評価が「非常に良好」と「良好」である教諭の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	A	教科によって若干差があり、Dの判定を受けた教科すらあった。 教育課程上の（特に単位数の不足）問題、教科担当者の人員・配置、中学校での学習履歴等、根本的な問題の把握が不足していた。 教科内で改善策を協議した。深刻な状況にあることを真摯に受け止め、研究授業、授業ビデオ、学習内容の精選、自作プリントの活用、工夫改善のノウハウの科目間の共有等、さまざまな取組を計画した。
	③ 学習習慣の定着を図る。	各クラスの平均家庭学習時間が、1・2年生で2時間以上、3年生で3時間以上確保している生徒が、 A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満	B	各クラスの評価をA4点、B3点、C2点、D1点とし、その平均が2.5未満ならば改善策を検討 評価としては概ね良好であるが、クラスによって差があり、家庭学習習慣が全く定着していない生徒もいる。 次年度も同様の達成度判断基準で実施したい。
	④ 国公立大学への志望者数を増やし、合格率を高める。	夏季補習の内容に満足している生徒が A 受講生徒数の70%以上 B 受講生徒数の60%以上 C 受講生徒数の50%以上 D 受講生徒数の50%未満 センター試験の得点の平均点偏差値50以上の生徒が A 20人以上 B 15人以上 C 10人以上 D 10人未満 国公立大学合格者数が A 60人以上 B 50人以上 C 40人以上 D 40人未満	CまたはDの場合は改善策を検討 CまたはDの場合は改善策を検討 CまたはDの場合は改善策を検討	A D C

	⑤	思考力・表現力の育成のため、3年間を通した小論文指導を行う。	小論文テストの判定が標準以上の生徒が、 A 90%以上 B 75%以上 C 50%以上 D 50%未満	CまたはDの場合は改善策を検討 C	現行では、小論文を書く技術指導が主である。1、2年次には小論文のための知識獲得に時間をとる必要がある。 総合の時間だけで力をつけるのは無理がある。教務課と進路指導課が力を合わせ、例えば「小論文委員会」等をつくり全体的にバックアップする体制が必要。 小論文の力は総合の時間だけ、一部の教科だけ、という中では伸びない。「小論文委員会」等が必要。
	⑥	授業において情報機器を効果的に活用する。	A 授業で情報機器を月1回程度使用した B 授業で情報機器を学期に1回程度使用した C 授業で情報機器を年に1回程度使用した D 授業で情報機器を使用しなかった (※情報機器に視聴覚機器も含む)	A4点、B3点、C2点、D1点とし、全職員の平均が1.5未満の場合は改善策を検討 1.87	視聴覚係と協力し情報機器を整備し使用しやすくしたため、目標を達することが出来た。 しかしながら、まだまだ高い値とはいえないので、来年度も引き続き情報機器を活用するように啓発していきたい。
2	①	定期的な進路情報の提供に努め、進路ガイダンスを充実させる。	学年別進路ガイダンスを A 3回以上実施 B 2回実施 C 1回実施 D 実施せず	各学年の評価をA4点、B3点、C2点、D1点とし、平均が2.5未満の場合は改善策を検討 A	学年集会などでもう少し進路指導専任から、大学入試の方法等の講話がほしかった。 今後も同様に継続する。模試業者か予備校からの外部講師によるガイダンスを、各学年で年一度企画することで刺激を与え、進路意識のさらなる向上をめざす。
			自分の進路について A 常に真剣に考えることができた B 概ね真剣に考えることができた C 場合によって真剣に考えることができた D いつも真剣に考えることができなかった	A4点、B3点、C2点、D1点とし、平均が2.5未満の場合は改善策を検討 2.74	1年次より2年次の方が進路についての意識が高いが、目標が定まっていない生徒には焦りが見られるので、焦る必要がない、という指導も必要である。 進路学習（入試のしくみ、大学調べ等）のためLHの活用が必要。
			生徒に対する進路指導が A 適切で成果もあがっている B 適切であるが、成果は十分とはいえない C 十分行われているとは言えず、成果も不十分である D どんな指導が行われているのか分からない	各クラスの評価をA4点、B3点、C2点、D1点とし、平均が2.0未満の場合は改善策を検討 B	担任による面談では、どうしても学習指導と生活指導が中心になる。担任が新しい情報を得られるように工夫すべきである。 入試方式、大学・学部の種類等の身近な素材について、知識を効果的に与える方策を。 LHに進路指導専任の先生を招いて各クラス毎にガイダンス等を行う。
	②	生活記録「Just do it」を活用して個人面談を充実させ、的確な進路指導を行う。	生徒1人に対する面談回数を A 年平均5回以上実施 B 年平均4回実施 C 年平均3回実施 D 年平均2回以下実施	各クラス担任でA4点、B3点、C2点、D1点とし、平均が3未満の場合は改善策を検討 3.14	面談が必要になる面は、模試返却時、定期考査時、コース登録時など多いにもかかわらず、それを十分に行う時間が不足気味である。 面接週間を明確に決め、放課後の会議を行わず、担任が面談しやすい状況を設定する。 「Just do it」自体を学校経営計画からはずすか、以前のように「Just do it 等」としてほしい。

Y		③ 先輩・教職員による講話を通して、自らの人生設計について考えさせる。	先輩・教職員との交流により視野を広げ、人生について考えるようになった生徒が A ほとんどである B 70%程度である C 約半数である D 一部である	各クラスでA4点、B3点、C2点、D1点とし、平均が2.0未満の場合は改善策を検討 3.13	「卒業生と語る会」は、身近な先輩の体験談を聞くことができ、有意義であった。これを2年と3年で行うとよい。時には社会人を招く。 面談や講話を通じて考える生徒が増加している。進路指導課で提示資料を開発・蓄積し、資料の利用を学年集会で担任団が行うのがよい。
		④ 生徒の良好な人間関係作りを支援する。	A 相談室員でなくクラス担任が実施 B 3学年とも複数回実施 C 1年生は2回、他学年は1回だけ実施 D 1年生は2回、他は2・3年のどちらかが実施 (BCDはクラス担任実施に向けての相談室員による模範活動)	CまたはDの場合は改善策を検討 C	LHを利用させてもらう現状では、今以上に実施回数を増やすことはむずかしく、HRAの協力も得にくかった。 グループカウンター活動を広めるには校内研修会等で啓発する必要があるが、なかなか実現できず、現実的ではないので、評価の達成基準を変更していきたい。 「居心地のよいクラス作り」のアンケートで出てきた「要支援生徒」との面談の実施率を高めて、課題を抱えている生徒を支援することで良好な人間関係作りを目指したい。 年2回「いじめ」アンケート実施、来年度も引き続き実施していきたい。アンケート結果を担当に連絡していきたい。
			いじめが A ない B 1件あった (ある) C 2件あった (ある) D 3件以上あった (ある)	Aでなければ改善策を検討 A	アンケートを行うことによる抑止効果がある。続けたい。
3	学校行事等あらゆる機会を利用して、生徒が自信に満ちた自主的な活動ができるよう工夫をこらさず。	① バランスのとれた体力の向上を図る	新体力テスト(握力・上体起こし)で、1回目よりも向上した生徒が A 75%以上 B 50%以上 C 25%以上	CまたはDの場合は改善策を検討 A	体育科としては、どちらか一つでも向上した生徒が86.6%。向上はしていないが、前回と同じ記録の生徒も多く、2種目両方は厳しく困難。因みに、2種目とも向上したのは、44.6%であった。
		② 部活動の加入をうながし、学校全体の活性化を図る。	部活動加入率が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70 %未満である	CまたはDの場合は改善策を検討 B	全員加入を奨励しているので加入率は何とか維持している。ただし、学年があがるごとに減少傾向にあることが懸念点。 退部の際、顧問が代わりに部を考えさせる指導をしていて、再加入を促すことにつながっている。 入学時の全員加入を徹底させ維持するため、部活動登録時間を設定(例えば水曜7限)し、明確にする。
			A 大変意欲的に活動している B ある程度意欲的に活動している C 何となく参加している D 参加する気がない	A4点、B3点、C2点、D1点とし、平均が2.5未満の場合は改善策を検討 2.47	部活動を充実できない理由の一つとして、生徒も教師も多忙なことがあげられる。全員加入で何となく入部した生徒が混じり意欲がそがれる。教師の工夫次第でがんばれる生徒もいるので、平日に指導できる環境を整える必要がある。 全員加入の結果、文化部の加入が多くなる傾向がある。 達成度基準を現実的なものに見直したい。(A:大変意欲的に活動している B:意欲的に活動している C:ある程度意欲的である D:何となく参加している)

③ ボランティア活動への自発的な参加を促進する。	ボランティア活動について、 A 教職員が共に行動した B 機会を見つけて啓発した C 年1回位は啓発の機会を設けた D 奨励も啓発もしなかった	A4点、B3点、C2点、D1点とし、平均が2.5未満の場合は改善策を検討 2.27	職員の「ボランティア」のとらえ方にずれがあるようだ。町の一斉清掃は大きな行事であるが、その他にも、緑の羽募金、除雪当番、明倫祭の収益一部寄付などさまざまなことを行っている。 クラス担任によるLHでの話やプルタブ収集やごみ拾い等の声かけも啓発の一つと思われる。 生徒会が中心となり、一斉町内清掃などLHで行う。 こうした身近な活動を気軽に行うところからはじめると難しくないのでは。
④ 全員一斉清掃の徹底により、美化意識を高める。	A 常に監督箇所に出向き十分に指導、点検している B 監督箇所に出向き点検しているが、生徒の指導は十分ではない C 時々、監督箇所に出向き点検している D 指導も点検も十分していない	A4点、B3点、C2点、D1点とし、平均が2.5未満の場合は改善策を検討 3.74	全員一斉清掃は定着していると思われるが、遊んでいる生徒の姿も目立ち、より一層の監督指導が必要である。 教職員により清掃方法やルールの理解がまちまちなので、一度、意思統一をしておく必要がある。
⑤ 危機管理意識を高め、事故の防止と発生時の対応に万全を期す。	危機管理に関する校内教職員研修・訓練を A 年間5回以上行う B 年間3～4回行う C 年間1～2回行う D 全く行わない	CまたはDの場合は改善策を検討 B	今年度は不審者の侵入事件が発生した。次年度は、より高い意識をもって研修・訓練をする必要がある。
⑥ 生徒の読書を促進する。	全学年の月間平均貸出冊数が A 220冊以上である B 200冊以上である C 180冊以上である D 180冊未満である	CまたはDの場合は改善策を検討 A	本年度の月別の平均貸出冊数は、4月152冊、5月238冊、6月238冊、7月330冊、8月125冊、9月209冊、10月231冊、11月244冊、12月288冊、1月447冊、2月145冊、3月蔵書点検で、月間平均貸出冊数は241冊であった。 各学年に数名ずつよく借りる生徒がいて、特に3年生にそういう生徒が多かったので、目標を超えた。しかし、来年度の生徒もそうとは限らないこと、また、1クラス減の影響も考えられるので、数値目標は本年度と同じにする。 読解力・思考力・洞察力・想像力等の養成のため、また、確実に信頼できる情報源として読書を勧め、よく読む生徒と全く読まない生徒の格差を縮めていきたい。
⑦ 保護者に、PTA主催行事や学校行事に積極的に参加してもらう。	総会、学年別懇談会、公開授業、教育ウィークにおける保護者の延べ参加率 A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満	CまたはDの場合は改善策を検討 A	総会出席者数は、学年別懇談会との延べ数476人で、出席率は52.1%であった。土曜日開催とし保護者の出席しやすい状況をつくるとともに、当日は第1限～第5限を公開授業とすることで興味・関心を喚起したことが成果に繋がった。 明倫祭においては、保護者の参加がかなりあったと思われる(120名程度)。母親委員会は例年、喫茶店を開催している。 例えば、外部講師による保護者向けの講演会や進路ガイダンスなどを行い、活動の目玉となるものを設定することも必要である。
	「朝の挨拶運動」における保護者の参加率 A 50%以上 B 40%以上 C 30%以上 D 30%未満	CまたはDの場合は改善策を検討 A	参加者数503人、参加率55.1%であった。本校PTAの看板事業として確実に定着してきており、生徒の礼節・身だしなみは大幅に改善され、好ましい状況が維持されている。今後は、生徒会活動との連携を視野に入れ、新たな校風づくりを目指したい。 年度当初、執行部による「挨拶運動」参加の案がだされたが、生徒は、朝のSTテストがあること、執行部はただでさえ忙しいので無理等の理由で実施しないことになった。 この運動は生徒に対し、(遅刻の減少など)良好な影響を与えている。継続させたい。